

# 一 近世後期養蚕地帯の村落構造

— 福島県伊達郡伏黒村の事例 —

東北大学 長谷部 弘

福島県伊達郡(信夫郡も一部含まれる)は、一八世紀の中頃から蚕種生産地帯として大量の蚕種を生産し、関東以北の蚕種市場において大きな地位を占めるようになったことはよく知られている。しかし、この地位は、一九世紀にはいと次第に低下しはじめ、幕末開港以降、輸出市場を前提に再び全国有数の蚕種生産地帯として浮上するまで、蚕種生産の低迷をみる。このような近世期の伊達郡の主要蚕種生産地として、靈山の掛田村周辺、梁川村周辺、桑折の伊達崎村周辺、そして伊達・保原の伏黒村周辺の村々が指摘できる。本報告では、良質の文献資料が比較的多く残されている伏黒村を取り上げることによって、養蚕業を中心とした商品経済の展開をみせた「村」の「村落構造」を検討してみたい。

近世期の伏黒村は、耕地面積の九割を畑地が占め、田地はわずかに一割を占めるにすぎない「畑勝ち」の行政村である。一六七四(延宝二)年時点の村高が千四百三十三石余(田畑面積百三十町余)で本百姓数が七十八軒(人数四百人程度)であった。ところがそれから百四十二年後の一八一七(文化十四)年には村高が千三百石弱で家数二百三十九軒(千二百二十五人)に増大している。この間、蚕種業の急激な発展をみたことを考えると、人口増大の背景に蚕種業を中心とした商品経済の発展があったことは疑うことができない。

ちなみに、天明四年の記録のなかに、飢饉になる前の時期は「越後国より日雇人共年ニ多ク入込ミ信達両郡江召抱之人數老万人も可有之杯与申咄 当村江五百人者入込ミ可申候咄之所」という叙述もみられ、十八世紀後半の時期、越後から信達地方への広域かつ大規模な労働力移動が存在したこと、および伏黒村の養蚕農業経営においてけつして小さくない部分を出稼ぎ労働力に依存したこと、などがある程度推察することができる。

村内には、「南通りあらやしき」、「北通り」、「悪戸柳原新田河原」「平上ヶ戸」、「沖屋敷」などといった部落が存在するようだがその実態は現在のところ不明である。近世後期における村内の有力な養蚕農家として、現在確認できる範囲でも佐藤与惣左衛門家、佐藤孫左衛門家、小野五兵衛家、富田勤之丞家、富田忠左衛門家、八城権七家、八城太左衛門家などを特定することができる。それぞれの家は手作りの農業を営むなかで養蚕業(蚕種製造)や酒造を行い、同時に金貸活動を通じて土地集積なども行った。実態は不明の部分が多いが、いくつかの家においては一定の同族的な関係もみられる。特に佐藤与惣左衛門家や富田忠左衛門家には、養蚕日誌や農業日記、若干の金銭出納帳などが残されており、その経営の一端を明らかにすることができる。

周知のように、伏黒村はすでに一九五〇年代に一度調査研究が行われ、その報告も出されている(高橋幸八郎・古島敏雄「養蚕業の発達と地主制」一九五八)。今回の報告では、そのような先行研究の知見を前提としたうえで、新しく発見された資料群の検討も踏まえたうえで養蚕地帯における近世後期の「村落構造」の実態の一部を明らかにしてみたい。